

平成 30 年度 JKA 補助事業

「高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的調査研究事業」

経過報告

グループリビング運営協議会では、先駆的な高齢者小規模共同居住の運営者やこれからグループリビングをつくりたい事業者を対象に、法人の成り立ちや既存事業、地域性などが異なる中での運営について 3 年間の研究を行い、今年度が最終年度となります。様々な形態の高齢者住宅から運営の工夫や課題から学ぶことで、豊かに暮らすことができる高齢者住宅を普及させる道筋を探ることが目的です。

今年度は 1 月までにCOCOせせらぎ（神奈川県川崎市）、浦安（千葉県浦安市）、はっぴーの家ろっけん（兵庫県神戸市）の調査を終了し、2月に個別セブン（兵庫県尼崎市）、COCO湘南台（神奈川県藤沢市）、COCO宮内（神奈川県川崎市）等の調査を行う予定です。



COCOせせらぎ



ゆいまーる大曽根



銀木犀 浦安

委員会メンバー（アイウエオ順）

上野 勝代	京都府立大学 名誉教授
大江 守之	NPO 法人 COCO 湘南 理事長／慶應義塾大学 名誉教授
小島 美里	NPO 法人暮らしネット・えん 代表理事
近兼 路子	慶應義塾大学社会学研究科後期博士課程
土井原 奈津江	慶應義塾大学スポーツ医学研究所 研究員／SFC 研究所 上席所員
中西 眞弓	神戸山手短期大学生生活学科 准教授
林 和秀	NPO 法人暮らしネット・えん 職員／立教大学大学院後期博士課程
宮野 順子	京都光華女子大学短期大学部 講師

グループリビング

COCO 結いのき・花沢 2 号館の 近況



特定非営利活動法人結いのき
専務理事 井上肇

7月13日から15日までの3日間、内覧会を開催し620人を超す市民の方々が訪れました。10年前の内覧会と明らかに違うのは、女性が多いこと、そして「共同運営住宅」であることを自覚しての見学でした。それこそ10年前の内覧会では「高齢者福祉」の「介護施設」と勘違いされてガッカリされて帰られる見学者がほとんどだったのとは正反対でした。しかも、女性たちは「自分がひとりになった時のことを考えて」と共通した理由での見学でした。それから居宅支援事業所のケアマネも駆けつけていました。できるだけ自立で暮らせるようにサポートしながら、精神的にもほどよい緊張感と人間関係の中で暮らせる人には、グループリビングは最適との判断のようでした。

結果的には、12月27日の契約をもって10人の入居者がそろいました。70代2人、80代5人、90代3人の年齢構成で、性別は男性2人に女性8人です。



1号館と比べると、入居者同士の仲良い関係はまだまだのようです。1号館にはSさんという60代の男性がおり、その方の面倒見のよさで各人とのコミュニティが生み保たれていました。大きな影響と成果をSさんは作られました。2号館の課題はSさんのようなコミュニティ・リーダーが必要だということです。今のメンバーで誰がその役を引き受けてくださるか楽しみです。

複合施設として建物の半分に厨房施設とコミュニティ施設「結いのき協同センター・デポーカフェ」を併設しました。この協同センターの吹き抜けの大きな空間が、地域市民や生協組合員の憩いの場所となっています。デポー（ミニ即売所）とカフェはまだ行っていません。そもそもグループホーム結いのきが水害などで避難をしなければならない時の避難所としての建設でした。普段は自主事業や米沢市から委託された総合事業を中心に、会議や大学の先生らと市民の研究課題を取り組む場として活用されています。

厨房で作る「けんこう弁当」は日生産25と計画の42%で、これから本格的な営業拡大が必要になってきています。話題と課題が多い2号館は、多くの人々の関りの中で、自立と共生のモデルとなるよう努めています。どうぞ期待を！



グループリビング運営協議会メンバー募集中

グループリビング運営者はもとより、これから作りたい人、応援したい人、研究したい人、またグループリビングという名称に拘らず、グループリビングに類似した共生の住まいも対象にしております。

【活動内容】

1. グループリビングへの支援・相談
2. ワークショップの開催
3. ホームページの運営
4. グループリビングの調査研究
5. その他、本協議会の目的を達成するために必要な事業。

詳細は以下のURLにあります。

<http://glnet-groupliving.org/glnet/glnet-recruit>



てのひらの近況

特定非営利活動法人てのひら

理事長 石原智秋



第一日曜日のお昼前、三々五々にご近所の高齢者の方が集まって来られます。午前十時半頃から午後三時まで、月に一度のコミュニティ喫茶が開催されます。メニューは次の通りです

- ・提灯弁当 300円
- ・炊き込みご飯、卵焼き 250円
- ・押し寿司、お浸し 250円
- ・カレー、サラダ付き 250円。
そして、いずれにもすまし汁と
ミニコーヒーがつきます。
- ・手作りのシフォンケーキ 100円
- ・レギュラーサイズコーヒー 100円



喫茶提供者は私とグループリビングの住人Mさん、元調理師、民生委員、他数名が早朝から手伝って下さいます。言い出しっぺはMさんと私。始めてからもう三年が過ぎようとしています。

さて、住人の方々も数年が過ぎると、体調に大きな変化が出てきます。あれだけお元気だったYさんは要介護Ⅰに。Nさん、Sさんはこの頃、歩行が困難。Iさんも緑内障が進みいずれも要支援Ⅱ。新しく入居された方とMさんの二人以外は、外出の機会がほとんどなくなってしまいました。そんな住人にとって、月一度とは言え、コミュニティ喫茶は、地域の高齢の方々との出会いの場となり、住人だけの夕食とはまた違った新鮮なものとなっています。好きなメニューを選び、夜の食事用にと追加注文される住人達。(日曜日のご家族が来られることを前提に、提供なし) いつの間にかリビングの隣のお婆さんと親しくなったIさん、普段とは違う笑顔がこぼれます。

そんな中、食欲も旺盛、いつも元気な九十九歳のBさんが転倒。動けない。夜の九時過ぎ、たまたま気が付かれた隣室のMさんから大腿骨骨折らしい、と連絡があり駆けつけました。まだヘルパーとして現役のMさんに助けられ、救急車で搬送という事態になりました。夜勤者の常駐しないことを何となく案じておりましたが、昔の長屋もどきの「第三の住まい」、そう、グループリビングは高齢化の進む中、隣近所の助け合いにより、健全な形で動いていることを改めて実感した出来事でした。

入居時、ご本人が望まれるのであれば、介護保険を利用しながら最期まで居て下さっていいですよ、との説明をしておりました。

しかし、ここ数年、当時お元気であった方々が、薬の服用、点眼と簡単な日常生活ができにくくなっている傾向にあります。また、一人での入浴が無理になったりし始めました。でも、介護保険認定は年々厳しくなり、施設入所は要介護Ⅲ以上、在宅で独居の方は、思うような介護度は出ず、隣近所の善意に頼るだけでは無理になってきました。

幸い、てのひらでは、法人内に居宅介護支援事業所(ケアマネージャー)とデイサービスを持ち、今は週一回のヘルパーで必需品の買い物を、二回のデイサービス利用で入浴を、朝はそれぞれ自分たちで、昼はてのひらのスタッフが、夜はサポーターが食事の配膳をと、安心した生活を送っていただいています。が、今後、入居時説明の言葉が重くのしかかってくるのだろうか、少し不安を抱えながら、今、グループリビングの在り方を考えています。



川崎シンポジウムのお知らせ

JKA 補助事業「高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的調査研究事業」の総括として、3月31日にシンポジウムを開催いたします。基調講演は上智大学総合人間科学部教授 栃本一三郎先生に決定いたしました。また今回は、川崎市内のJR南武線沿いにある3つのグループリビングの見学ツアーも行います。

詳細はメール、HPにて2月初めにお知らせいたします。皆様お誘いあわせの上、ご参加くださるようお願い申し上げます。

日時	グループリビング見学ツアー	3月30日(土)	10:00~16:00
	(COCO宮内でのランチ付き)		
	シンポジウム	3月31日(日)	13:30~18:00
	懇親会	3月31日(日)	18:30~20:30

場所 川崎グループリビング見学ツアー

見学順 おでんせ中の島→COCO宮内→COCOせせらぎ

シンポジウム・懇親会 川崎市国際交流センター(神奈川県川崎市中原区)

*川崎市国際交流センターには宿泊施設があり、新幹線やJRとセットのツアーが楽天トラベルなどで販売されているようです。

見学場所等 参考HP

- ◆おでんせ中の島 <http://suumo.jp/journal/2016/10/08/119087/>
- ◆COCO宮内 <http://cocomiyauchi.main.jp/>
- ◆COCOせせらぎ <https://coco-hokubukawasaki.jp/>
- ◆川崎市国際交流センター <https://kian.or.jp/>



この会報は、公益財団法人JKA補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動」で運営されています。

編集後記

最近、身近なグループリビングで、認知症居住者の対応に接することが続いた。ケアが目的でないグループリビングの課題の一つは認知症などで介護ニーズが高くなった時の対応である。その時になって運営者、居住者がお互いに納得できるためにはどうすればいいだろう。まず、優先して考えなければいけないのは当事者の意向である。ただ、住み続けたいという意向だけでなく、そうなった時に生活の質を保ち、共同生活を維持するための具体的なサポート体制等についての意向である。介護ニーズが高くなると介護保険サービスだけでは生活の質の維持は難しい。それを埋めるためのサポートとして介護保険外サービスや生活サービスを利用することになるが、それは居住者にとって経済的な負担となる。そして、そのサポートを付けたとしても、共同生活は難しくなる場合もある。運営者、居住者が共に納得できる対応にするためには、いろんな場合を想定し、居住者自身が自分の望む対応を明確にしておくことが必要なのではないか。そのためには、まず、運営者は、住まいが提供できるサービスを居住者に伝えることがベースになる。そして、居住者に対して生活の質を保ち共同生活を維持するために必要なサービスやその費用など経済面を含めた情報提供があるといい。それをもとに居住者はどのような対応を望むかを考えることができる。この課題は難しいので、居住者同士、または、運営者と居住者がみんなで話し合う場があるといいかもしれない。また、居住者は、一旦意向を決めたとしても、時間とともに考えが変わるかもしれないし、地域のサービス内容や費用も変化する。そう考えると頻繁にこの課題について考える機会やその時点での情報提供が必要になる。さらに、介護ニーズが高くなった時、居住者の家族や身近な親族等が現れ、住み続けや転居についての主導権を持つことが多い。居住者は家族等とも自分の意向について話し合い、文書にしておくことも重要だろう。今年もグループリビングの様々な課題について協議会を通して居住者、運営者、研究者、支援者と一緒に考えていきたい。3月に行われるシンポジウムはそのような場の一つである。ぜひご参加ください。な

編集委員 小島美里 土井原奈津江